

# 短篇小説における技巧

——モームとヘミングウェイについて——

三 留 修

## 〔I〕

K. Mansfield, E. A. Poe, O. Henry, など英米には短篇小説ばかりを書いて、長篇小説を書いてなくても一流になっている作家もいるが、ほとんどの作家は短篇と長篇の両方を書いている。アメリカ文学においても, Steinbeck, Hemingway, Faulkner といったノーベル賞受賞作家ばかりでなく, Mark Twain, Caldwell, Malamud, Saroyan などすぐれた短篇をたくさん書いている作家は多い。Caldwell の *Georgia Boy* や Steinbeck の *The Red Pony* のように短篇をいくつか集めて、1つの長篇小説のような形をとったものもある。ここでは Hemingway の作品から *The Killers* と, S. Maugham の作品から *The Happy Couple* をとりあげて述べてみたい。Maugham には若い時代に書いたものと同じ題名で、または題名はちがうが同じ題材を用いて後年になってから書いた短篇が3篇ある。それは *The Happy Couple*, *A Marriage of Convenience*, *Cousin Amy* (後の作品では *The Luncheon* となっている) で、はじめの作品はいずれも1906年から1908年の間に書かれている。アメリカ文学では短篇に使われている題材が後に長篇に用いられることはあるが、上の3篇のような例はあまりみられない。

Hemingway の場合には、*The Fifth Column and the First Forty-nine Stories* (1938) が最後に出版された短篇集で、1939年以後には Hemingway は短篇をほとんど書いていない。Hemingway の作品の特質は直接的で、視覚的であり、非情な文体にあるといわれている。また彼は自分の生きた時代、環

境を鋭い観察力で、現実には自分の眼で、感情にとらわれることなく客観的に描いているといわれている。*The Short Happy Life of Francis Macomber* は Hemingway の特徴を述べる時、いろいろな点で注目されるであろうが、後で述べる *The Happy Couple* の長さを考えて、ここでは *The Killers* をとりあげる。この作品はほとんど会話だけで成り立っていて、登場人物の性格、場所の説明などはあまりなされていないし、自然描写は非常に少ない。Maugham の後期の短篇では登場人物をふやすことで演劇的效果をあげようとしているのに対し、Hemingway の短篇ではいつも登場人物の数が少なく、story も簡単でわかりやすいものになっていることが多い。*The Killers* でも例外ではなく、登場人物は少年 Nick と食堂の George、そして殺し屋の2人 Albert (通称 Al) と Max、殺し屋にねらわれている Ole Andreson の5名が中心である。しかも Andreson は最後の方に登場するだけであり、他には食堂のコック黒人の Sam と、Andreson の下宿の管理人が出てくるが、重要な役割にはついていない。story の中心になるものは Nick と2人の殺し屋が対面している恐怖の2時間10分ほどの間と、Nick が Ole Andreson に殺し屋が来たことを知らせに行く間のわずかな時間の出来事である。

つまり、ある食堂に Nick と George、黒人の Sam がいるが、そこに2人の男がそっくり同じような殺し屋スタイルの服装で入って来る。この2人は誰かに頼まれて、元ボクサーの Ole Andreson を殺しに来る。彼が6時になるとこの食堂にやって来ることを知っていて、5時頃に殺し屋が入って来て、7時頃まで食堂にいるが、Andreson がやって来ないので、あきらめて帰る。Nick はすぐに Andreson に知らせに行くが、彼は服を着たままで壁を見つめながらベッドに横になっている。Nick が殺し屋が来て彼を狙っていることを説明しようとしてもそのまま壁を見つめたままである。彼はすっかりあきらめているかのように逃げようとしめない。Nick は食堂にもどり、これから町を出るという。これだけの story でありながら、Nick の負けず嫌いな性格、George の Andreson を助けたいと思いがらなかなかうまくいかないもどか

しき、Sam のもめごとには巻き込まれたくないという気持、Andreson のあきらめきった生き方、殺し屋の本気で Andreson を狙ってはいるが、どこか喜劇的な面がある点などが描かれている。

Hemingway の作品では登場人物が少ないということと、時間的にも短い間の出来事が描かれているのは大きな特徴であるが、それは短篇においてばかりではなく中・長篇においてもみられる。たとえば、*The Short Happy Life of Francis Macomber*, *For Whom the Bell Tolls*, *The Old Man and the Sea* などはいずれも1日から4、5日の間の出来事が描かれている。その中でも *The Killers* は最も短い時間内の出来事で、殺人が行なわれるかもしれないという恐怖のどん底に突き落される Nick や George の心理状態はほとんどが会話と、時間が5分たったとか、10分たったとか時間の進行だけで描かれているところがある。殺し屋に、食堂に客が入って来たらコックがいらないと言って断れ、と言われ、George は客が入って来た時に次のように言って断る。

*George looked up at the clock. It was a quarter past six. The door from the street opened. A streetcar motorman came in.*

‘Hellow, George,’ he said. ‘Can I get supper?’

‘Sam’s gone out,’ George said. ‘He’ll be back in about half an hour.’

‘I’d better go up the street,’ the motorman said. *George looked at the clock. It was twenty minutes past six.*

‘That was nice, bright boy,’ Max said. ‘You’re a regular little gentleman.

‘He knew I’d blow his head off,’ Al said from the kitchen.

‘No,’ said Max. ‘It ain’t that. Bright boy is nice. He’s a nice boy. I like him.’

*At six-fifty-five George said: ‘He’s not coming.’* <sup>(1)</sup> (イタリックは筆者)

この文のはじめで George は…… *looked up at the clock.* と時間をはっきりと気にしているし、また客を断った後でまた時計をみるが、こんどは……

looked at the clock. と何気ないふりをして時計をみるのである。Andreson が食事に来る時には大体 6 時頃に来ることになっているので、今日は来ないでほしいという George の願いがこめられているのがよくわかる。そのためには少しでも早く時間が進んでほしいと思っているのに 5 分しかたっていないので、George は焦り、やきもきしているのである。これだけの文章をみても George の心の動揺がはっきりと読みとれるのである。そして 6 時 20 分から 6 時 55 分になるまでは殺し屋 2 人の会話であっさりと進行し、6 時 55 分になると George は 'He's not coming' とだけ言うが、ここにはすでに Andreson は姿を見せないだろうという George の安堵感がうかがわれる。これだけの短い文章だけでは十分に *The Killers* の story の運びはわかりにくいかもしれないが、Hemingway の文体の特徴の一端はうかがえるかと思う。つまりひとつひとつ説明することをしないで、Hemingway はどんどん story を進行させていきながら、その行間からそこにいる人物の心理を十分に想像させる手法を用いる。これもすでにいろいろな機会に言われ、書かれてきたことではあるが、この作品の後半で、Nick が Andreson の部屋に行くと、彼は壁を見つめたままではいるところがある。その wall という語がわずか 1 頁の中に 6 度も出てくるのは絶望の象徴として用いられている、といわれているが、この他にも *Indian Camp* の wall, や *A Farewell to Arms* の rain も同様の象徴とみてもよいと思う。しかしこの *The Killers* の中の wall はあまりにも見えずいた小道具のように感じてしまう人もいるかもしれない。この部分をすべて引用するとあまりにも長くなるが、それでも途中を抜きながら書いてみる。

'They put us out in the Kitchen,' Nick went on. 'They were going to shoot you when you came in to supper.'

Ole Andreson looked at *the wall* and did not say anything.

.....

'I'll tell you what they were like.'

'I don't want to know what they were like,' Ole Andreson said.

He looked at *the wall*. 'Thanks for coming to tell me about it.'

.....

'Maybe it was just a bluff.'

'No. It ain't just a bluff.'

Ole Andreson rolled over toward *the wall*.

'The only thing is,' he said, talking toward *the wall*, 'I just can't make up my mind to go out. I been in here all day.'

'Couldn't you get out of town?'

'No,' Ole Andreson said. 'I'm through with all that running around.'

He looked at *the wall*.

'There ain't anything to do now.'

.....

'So long,' said Ole Andreson. He did not look toward Nick.

'Thanks for coming around.'

Nick went out. As he shut the door he saw Ole Andreson, with all his clothes on, lying on the bed looking at *the wall*.<sup>(2)</sup> (イタリックは筆者)

このように wall が使われているのである。Hemingway の初期の作品にはしばしばこのように絶望というよりもあきらめの心境が描かれている。Nick Adams が出てくる物語だけをとりあげても、*The Battler* 中の Nick は汽車から突き落されて怪我をしても、ただ乗りをしたのだからしかたがないと考えてしまうし、*Ten Indians* でも女の子 (Prudence) にふられたと思い、一度は泣き出してしまいが、すぐにあきらめてしまう。

上記の wall という語を用いたのはそれほど Hemingway 独特の技巧ではなく、ごくあたり前に使われている言葉であり、またあきらめと取るのも当然かもしれないが、Hemingway はごくあたり前の言葉を使って、あきらめて死を待つというよりもむしろ生に向かうために、Andreson がじっくり待ってい

る姿を表わしているのではないだろうか。生にしがみつく男の姿をさりげなく、平易な言葉で描いているように思われる。

Hemingway の後期の作品になるとこのあきらめがねばりに変わり、*For Whom the Bell Tolls* の Robert Jordan や *The Old Man and the Sea* の老人は、結果はどうなっても自分の力の限りにねばり抜く生き方が描かれている。彼らは自分の生命のことなどは考えないで自分の行動を成しとげることだけを考えて最後まで闘い抜く生き方をしている。これらの作品よりも以前に書かれている *The Killers* の Andreson においてもあきらめよりもじっと時期を待っている姿とみたい。

Hemingway の作品では主人公の年令が後の作品になるほど上ってきていて、それにしがって主人公の生き方も変わってきているという点で自伝的要素が強いともいわれている。Hemingway は若い時にほとんどの短篇を書いたと先に述べたが、Hemingway の短篇を述べる時、主人公の年令はどうしてもかなり若いということになる。Hemingway の描く主人公たちは単純素朴で、思考より行動を中心にし、暴力の世界に巻き込まれ、強烈な個性をもっているといわれるが、短篇に関する限りすべての主人公が若いというのも特徴の1つである。*The Killers* においても Nick がまだ子供であるのに殺し屋に出くわすということは shocking な事件であるはずなのに、Nick の将来に与える影響についても、言葉を加えずに、story の中での役割についてしか書かないところはいかにも Hemingway らしい点であろう。文体に関しても、*The Short Happy Life of Francis Macomber* にはかなり長い読みにくい文章も用いられているが、*The Killers* に限らず短篇の多くは会話中心で、短い文章で書かれ、story もはっきりしている作品が多く、一見誰にでも書けそうな文体で書かれている。そのために読む側にとっても読み易く、story がはっきりしていて、面白いために、うっかりすると story のみにとらわれてしまう危険性は大きいにある。しかし反対に story がわかり易いだけに、行間を読みとろうとする余裕のようなものはもてる。一方 Maugham も story の面白さでは Hem-

ingway に劣らない。

## 〔Ⅱ〕

Somerset Maugham には *The Happy Couple* という短篇があり、これは殺人を犯した1人の女性が裁判で無罪になり、現在は結婚して幸福な生活を送っているが、ある日、その夫婦はその殺人事件のことをよく知っている人に出会ったために翌日になると姿をくらましてしまう、という物語である。そして Maugham はこの同じ題名で若い時(1908年)、と晩年(1947年)になってからと2度にわたって書いている。そこで、表面は幸福そうに見えるある夫婦に関して描かれている *The Happy Couple* の前期の作品と、後期の作品とは内容がどのように変わっていて、後期の作品には技巧的な面での変化がどのように加わっているかを述べてみたい。

まず *The Happy Couple* の前作(以後、前期の作品を前作とし、後期の作品を後作とする)では *old maid* の Miss Ley の眼を通して物語が描かれていて、彼女は近所に住む中年の Craig 夫妻に関心を持って2人の生活を注意深く観察していくのである。彼らには1才ぐらいの子供がいて、毎日この2人は、一緒に子供の面倒をみている。そして彼らはいつも仲が良いので、Miss Ley はその姿をみているうちに、彼女の頭に1つの愛情物語がうかんでくるのである。そのうちに Miss Ley は自分で作った story を、実際にその2人に起ったものであると信じてしまうようになる。

Miss Ley の作った story というのは次のようなものである。Craig 夫妻は20年ぐらい前に恋をしたが、お互いに貧しくて結婚生活に入ることが出来ず、男の方が資金を作り、the Colonies へ出かけることになる。ところが10年、15年、20年と年月が過ぎていくと、若かった2人も年を取り、男の方は白髪が多くなり、女性の方も容姿がやつれてくる。やがて彼の仕事がうまくいって、2人とも中年になってから再会できることになる。しかし彼女は、彼が立派になって帰って来たのに、自分の方は狭い土地に閉じこもった生活をしてい

て、やつれてしまい、20年前の彼との約束のために、彼をしぼることは恐るべきことだと思いこんで、彼女は彼と別れようとする。ところが彼の方は、彼女の彼に対する愛情がさめてしまったと思い込んで、がっかりした表情をみせるが、彼女は、その彼の表情をみて自分がまだ愛されていることを知る。そして2人は結婚する、という話である。

以上が Miss Ley が Craig 夫妻について作り出した story である。Craig という名前も Miss Ley のつけた仮の名であるが、彼女は、Craig 夫妻のそれぞれの本当の名前を知らないの、夫の方を Edwin、妻の方を Angelina という名前をつけて呼んでいる。また Miss Ley という old maid の名前については、R. L. Calder は、‘Miss Ley appears in *Mrs. Craddock, The Merry-Go-Round and The Happy Couple* (1908) ……<sup>(3)</sup>’ といい、上田勤氏も *Mrs. Craddock* について述べているところで次のようにいっている。

「バーサ(女主人公)の伯母のレイという独身者の老嬢がモーム好みの人物で、そのシニカルな警句は後年のモームをしのばせて、興味がある。」<sup>(4)</sup>(内筆者)

このように Maugham 好みといわれる Miss Ley が、この自分の作った story を彼女の友人である、医者 Frank Hurrel に話すのである。この Frank Hurrel についてもやはり Calder は、Miss Ley に関して述べているところで、‘Frank Hurrel plays a part in *The Merry-Go-Round and The Magician*,……’<sup>(5)</sup> といっているが、この *The Happy Couple* の前作に出てくることにはふれていない。この Miss Ley と Frank Hurrel が他の作品でも用いられていること、そしてこの2人が作者の分身の役割をしていることがわかる。

この Miss Ley が、Frank Hurrel に Craig 夫妻に関して作った story を話していると、昼食を終えて一服するために庭に出て来た Craig の姿を、Miss Ley の家のベランダから、Frank は見ることになる。すると Frank は Craig の顔に見覚えがあると、Miss Ley に言うが、彼は Craig の本当の名前を思い出せないでいる。そしてかなり時間がたってから、Craig 夫妻が



Frank と Miss Ley の方に近づいて来て、Craig と Frank とが顔を合わせたとき、Frank ははっと気づいて驚きの声をあげるのである。Craig 夫妻の方も驚いて、2人は本能的にお互いを守り合うように寄り添って、眼には恐怖の色をうかべるのである。とくに妻の方が恐怖の色がこくて、すぐに彼女は気を失ってしまう。Miss Ley は医者 Frank にみてやらないのかとたずねるが、彼は、自分が行くことを彼女は望まないであろうし、Craig も医者だから彼がみた方がよいと答える。この時点では、Miss Ley はなぜ Craig 夫人が気を失ったのかわかっていないのだが、Frank は Miss Ley に、Wingfield 殺人事件を覚えていないかとたずね、彼等の実体を明らかにする。彼は次のように Miss Ley に、その事件のことを説明してやるのである。

Miss Wingfield は中年の金持の未婚の婦人であったが、彼女がある日突然亡くなる。そして彼女と一緒に住んでいた住込みの家政婦にあらゆるものを遺産として残したことがわかるが、Miss Wingfield は日頃じょうぶな婦人だったので、彼女が急死することなど考えられなかったのである。そのうえその家政婦に関するいろいろなうわさが広まっていたので、警察で死体を掘り返して調べると毒殺だったことがわかり、その家政婦が逮捕された。その時、Frank は検察当局の医師団の1人だったのであり、その家政婦の弁護の証人になったのが Miss Wingfield の主治医の Brownley である。Dr. Brownley とその家政婦が財産目あてに Miss Wingfield を殺害したということを、Frank は確信していたが、ついに2度の裁判で陪審員の意見が一致せずは無罪となってしまう。その1週間後に2人は結婚したのである。Craig 夫妻、つまり Miss Ley の作った story 中の Edwin と Angelina が実は Brownley 夫妻だったのである。Frank と Brownley 夫妻が顔を合わせた翌朝には2人の姿は見えなくなっていた、ということで話が終る。

以上が前作のあらすじである。そして後作の *The Happy Couple* になると、narrator は Miss Ley にかわって「私」になり、old maid の名前は Miss Ley にかわって Miss Gray になり、医師 Frank Hurrel のかわりに判事の

Edward Landon が登場し、殺された Miss Wingfield の名前が、Miss Wingford にかわっている。前作では、Miss Ley の作った story の中の Angelina、つまり Mrs. Brownley の名前は出てこないが、後作では Miss Starling として出てくる。Craig 夫妻という想像上の名前は、前作、後作においても同じであり、前作の Miss Wingfield の主治医の Dr. Brownley が、後作の Miss Wingford の主治医では Dr. Brandon という名前になっている。ここで前作と後作の登場人物を整理してみると、

	前 作	後 作
narrator		「私」
old maid	Miss Ley	Miss Gray
companion	名前をあげていない	Miss Starling
殺された婦人の主治医	Dr. Brownley	Dr. Brandon
語り手の友人	医師 Frank Hurrel	判事 Edward Landon
殺された婦人	Miss Wingfield	Miss Wingford

大きな変更は前作で narrator をかねていた Miss Ley が後作では narrator の「私」と Miss Gray に分割されていることである。ほかに小さな相違点として、殺された婦人の名前が、Miss Wingfield から Miss Wingford、その主治医の名前が Brownley から Brandon となる点がある。そして、narrator の友人として登場する人物が、前作では検察当局側の医師 Frank Hurrel であり、後作では実際の裁判にあたる判事の Edward Landon になっている。後で述べるが、後作では判事が出てくるためか、裁判の状況がくわしく描かれている。

前作と後作との登場人物について述べたので、ここで後作の内容について述べる。後作では、Miss Ley にかわって「私」が narrator として表面に出てきて、「私」の眼からみた形で描かれているが、old maid の Miss Gray が作る Craig 夫妻に関する story は、前作とほぼ同じである。後作の内容は、まず Landon 判事と「私」が club の会員として付き合っていて、判事が保

養中に「私」に1度会いたいという電報を「私」がうけて、2人は会うことにする。それで「私」は友人の Miss Gray も食事に招待しておき、判事と Miss Gray の2人に御馳走する。翌日、こんどは判事と「私」が Miss Gray の家を訪れる。すると彼女は自分の家の隣りの Craig 夫妻を招待してあるので、判事の Landon, 「私」, Craig 夫妻, Miss Gray の5人で lunch party をすることになる。「私」は Miss Gray から、Craig 夫妻についてのいろんな話をすでに聞かされている。つまり「私」は彼らの毎日の生活のことや、Miss Gray が作った2人に関する例の作り話をさんざん聞かされているのである。

「私」はその作り話をあまり信用していないのだが、Miss Gray は無理にでも「私」に信用させようとする。Landon 判事, 「私」, Miss Gray の3人が、Craig 夫妻の来るのを待っている間を利用して、Miss Gray の作った Craig 夫妻の愛情物語が「私」から紹介される。やがて Craig 夫妻が現われて、Miss Gray が Craig 夫妻を Landon 判事に紹介をした時、判事はものも言わずにこの2人をじっと見つめる。そして判事は Craig 夫妻に、以前に会ったことがないだろうかとたずねると、ほんの短い時間ではあるが、Craig 夫妻はおびえたように身を寄せ合うのである。Craig は判事の名前は知っているが、会ったことはないと思うと答える。この時にはすでに Landon 判事も Craig 夫妻の方もお互いに以前に会ったことがあるということに気づいているのだが、判事は、*'More people know Tom Fool than Tom Fool knows.'*<sup>(6)</sup> (トム・フールが知っている人間より、トム・フールを知っている人間の方が多い、というわけですね。)などと言いながら、Craig 夫妻を少しずつ精神的に責めていく。そして lunch になるのだが、話をつないでいるのは Miss Gray と「私」の2人だけで、判事はだまりがちになり、2回目の料理がでる頃になってやっと Craig 夫妻の方も会話に加わってくるが、2人は気持の動揺をかくしている。そうこうしているうちに急に Craig が立ち上ろうとして、床にくずれ落ちてしまう。「私」と Miss Gray には事情がわからず、なぜこんなことになったのかさっぱりわからない。1, 2分すると Craig が気がついたの

で、Craig 夫人と「私」で Craig を家送っていくが、その間 Landon 判事だけはそっけない態度をとっている。その後で「私」は Landon 判事に、Miss Gray が作った話を聞かせてやるが、判事は無表情で反応を示さない。それで「私」は判事に Craig 夫妻のことを何か知っているのかとたずねるが、彼は何も知らないと答える。翌日の昼食の時に、「私」が Miss Gray から聞いた、Craig 夫妻が逃げ出したという話を判事にすると、そこでやっと、Landon 判事は、「私」に Wingford 殺人事件を覚えているかと、問いかけてくるのである。そして彼は「私」にその殺人事件の内容をくわしく話しはじめる。その内容は前作の場合と大体同じであるが、前作よりもずっとくわしく説明することになる。

後作では Miss Wingford の家に30年もいる女中が新たに加えられている。その女中が遺産をいくらかもらえと思っていたのに、自分には何も遺されていないので彼女は気を悪くしてさわぎたてたのである。彼女があまりうるさく言うので、ついに警察がとりあげて死体の発掘命令を出し、検死の結果、Miss Wingford はペロナルの飲み過ぎで死んだことがわかり、それを飲ませたということで Miss Starling が逮捕される。そして Miss Starling と、Miss Wingford の主治医の Dr. Brandon とがうわさの種になっているという意外な証拠がでてくる。Miss Starling と Dr. Brandon の2人は、夜になるとお互いの腰に腕をまわしながら歩いていたとか、2人が Brandon の家でキスをしていたのを見たとかの証言も得られた。また殺された Miss Wingford は楽しい毎日を過ごしていて、しかも昔の友人が遊びにやってくるようになっていた2日前に死んだこと、日頃、彼女は丈夫だったことなどの事実をつかんでいたのも、Miss Starling と Dr. Brandon に、Miss Wingford 殺害の動機は十分にあったと思われた。それで Dr. Brandon も逮捕され、そしてこの事件を担当したのが Landon 判事だったわけである。その起訴理由は、Miss Starling と Dr. Brandon の2人が愛し合っていて、Miss Starling が雇主の Miss Wingford にとりいり、遺産を贈るということを書かせておき、Miss

Wingford を殺してその遺産で 2 人の結婚生活を営もうとした。そして Miss Wingford が毎晩飲むココアに、Miss Starling が錠剤を溶かして飲ませた、ということであった。被告側はかなりでたらめな弁明をしていたので、有罪は確実だとされていた。ところが医師が Miss Starling の検査をしたところ、彼女は完全な処女であることが証明された。これが決め手となって、2 人は無罪ということになってしまうのである。2 人は犯人であると推測されるに十分な状況があったのに、Miss Starling が処女だったことだけが、重要視されて、陪審員は無罪という答申を出したということになる。以上が後作のあらすじである。

前作と後作に出てくる登場人物の名前がどのように変っているかについてはすでに述べたが、前作の Frank Hurrel, Miss Ley, 後作の Miss Ley, 「私」, Landon 判事は作者 Maugham の分身とみてよいと思う。作品の中の登場人物が作者の分身であることに関して、Maugham は *The Summing Up* の 61 章で次のように述べている。

But the point of the writer is that he is not one man but many. It is because he is many that he can create many, and the measure of his greatness in the number of selves that he comprises. When he fashions a character that does not carry conviction it is because there is in himself nothing of that person; he has had to fall back on observation, and so has only described, not begotten. The writer does not feel with; he feels in. It is not sympathy that he has, that too often results in sentimentality; he has what the psychologists call empathy. It is because Shakespeare had this to so great a degree that he was at once the most living and the least sentimental of authors. I think Goethe was the first writer to grow conscious of this multiple personality, and it troubled him all his life. He was always comparing the writer that he was with

the man, and he could not quite reconcile the discongruity. (7)

つまり登場人物を複数化できるのは、作者自身の中に多数の自我があるからであり、真実と思わせる力を持った人物を描くことのできるのは、作者自身の中にそのような人物を持っているからである、と Maugham は述べているのである。したがって narrator も作者自身ではなくて、作者の分身なのである。Maugham はよく自分の経験をもとにして作品を書くことがある、といわれているので、どうかすると Maugham の作品の中に出てくる「私」を、Maugham 自身ととりちがえてしまう。*The Happy Couple* においても前作では narrator の Miss Ley と Frank Hurrel の2人が作者の分身であり、後作では「私」、Miss Gray, Landon 判事の3人が作者の分身として描かれている。「私」だけが作者であるということにはならず、しかも narrator の「私」よりもむしろ Landon 判事の方が作者の分身の色合いがこいのである。判事自身もこの裁判の不合理を強く感じている。2人の被告が殺人の罪を犯したということを、法廷にいた者はすべて信じているような雰囲気があったのである。判事は現在でもこの2人が共謀して、無慈悲な殺人を犯したことを信じている。

### 〔Ⅲ〕

次に前作から後作への形式の変化、内容の変化を述べてみたい。形式についての变化の最も著しいのは、前作では Miss Ley の眼からみて描いていたものが、後作では「私」という1人称の narrator が出てくることである。そして Maugham 得意の風刺と、appearance と reality を一緒に論ずることにする。前作も後作も、表面は幸福な夫婦が実は過去に殺人を犯し、かろうじて無罪になったが、現在は世間の眼を逃れて2人だけで静かで平和な生活をしているという物語である。しかし後作では殺人と処女性とを、どちらを重くみるのかということが、大きな主題の1つとして出てくる。前作では殺人を犯した companion の処女性ということにはふれていないので、なぜ彼女が無罪にな

ったのか、また Dr. Brownley が逮捕されることなく、彼女の証人になっているので、彼女に薬を渡したのかどうかも、すべて明らかにされていない。しかも裁判に関係していた医師の Frank Hurrel 自身が Wingfield 殺人事件の説明をしているのに、法廷の場面は後作ほど詳しくない。若い頃の Maugham の眼は、表面上幸福に見える夫妻が実は殺人という罪を犯した共犯者同志で仲が良い、という筋だけに向けられていて、その殺人事件の裁判の内容や、Maugham の風刺を読者に強く印象づける方法は前作では期待できない。それに比べて、後作では裁判の経過と決め手になったところを次のようにはっきりと述べている。

The accused elected to give evidence on their own behalf, and they made a miserable showing in the witness-box. They lied their head off. Though witness testified they had seen them walking together at night with their arms round one another's waists, though Brandon's maid testified she had seen them kissing one another in the doctor's house, they swore they were no more than friends. And oddly enough, medical evidence proved that Miss Starling was *virgo intacta*. (8)

ここでは完全に処女を殺人よりも重要なものとみている処女崇拝が描かれている。もっとも処女崇拝や, *apperance* と *reality* とのちがいを描いているのは Maugham 以前にも, Thomas Hardy が *Tess of the D'Urbervilles* の中で描いているところがある。進歩的な思想をもっている理想家の青年, Clare と Tess との新婚の夜, お互いの過去の誤ちを告白し合うところで, Tessの方は Clare のかつての女性関係を許したのに, Tessの方が, 自分の責任ではなくて, だまされて処女を奪われたことを告白すると, Clare はそれをどうしても許せないのである。この作品が出た時にはずい分物議をかもしたという話であるが, Hardy は処女性偏重の社会通念をはげしく攻撃したものであろう。もっとも Maugham が *The Happy Couple* を書いたのは後作の方は Tess…

(1891)の50年以上も後のことだから、処女性偏重もそれほどひどくはなかっただろうが、保守的な英国のことだから相当根強く残っていたのを Maugham としては皮肉って見たかったのだろうか。

後作では Maugham は、はっきりと Miss Sterling と Dr. Brandon の仲が恋愛関係になっていたのに Miss Starling が完全な処女であったことを書いている。そしてこれが無罪の決め手になったことを示している。Tess…の場合と同じように *The Happy Couple*, とくに後作では被告は殺人を犯しながら、結婚前に肌身を許そうとしなかったことで、2人は恋人同志ではなかったと証明され、この点だけの美点で Craig 夫妻は救われたわけであるが、これは Maugham の、Puritanism に対する痛烈な皮肉で、殺人と処女性のどちらが重大であるかは今さら説明の余地はないはずである。処女を守ることはもちろん大事であろうが殺人と処女性とは比較の次元が違う。前作とちがって後作ではこのように処女崇拝に対する風刺が新しい要素として加えられている。処女性を非常に重要視する Puritanism の考え方に対する Maugham の皮肉であると推測される。若い時の Maugham はキリスト教について *A Writer's Notebook* の1894年の章で次のように述べている。

It is doubtless true that we owe many of our virtues to Christianity, but it is equally true that we owe to it some of our vices. The Love of self is the mainspring of every man's action, it is the essence of his character; and it is fair to suppose that it is necessary for his preservation. But Christianity has made a vice of it. It has decided that man should have neither love, no care, nor thought for himself, but only for his soul, and by demanding of him that he should behave otherwise than as his nature prompts, has forced him into hypocrisy. It has aroused a sense of guilt in him when he follows his natural instincts, and a feeling of resentment when others, even though not at his expense, follow theirs. (9)



つまり恋愛も、心配ごとも、自分のことを考えることも悪いし、自分の本能のおもむくままに行動することは罪である、ということである。この言葉から考えると、*The Happy Couple* の Miss Starling は処女性を守ったことで、本能にはしたがわなかったことになるが、実は彼女たちは遺産を手にして、結婚し、幸福な生活をしようとするのだから、自分たちのことだけを考えていることであり、むしろ彼女たちはいろんな本能のおもむくままに行動していたはずであって、これだけの理由で殺人を犯した者たちが無罪になってしまうのでは、殺された方はたまったものではない。しかも、出てきた遺書は Miss Wingford の自筆のものであり、法律的に有効であり、彼女の遺産は合法的に殺人者のものとなってしまったのである。もしこれが男の犯罪であったら無罪になるということはいえない。

また appearance と reality に関しては、後作の中で、Miss Gray が自分の作り話を弁護して、

‘Their love is founded on an illusion, perhaps; but since it has to them all the appearance of reality, what does it matter?’<sup>(4)</sup>

といっている。この the appearance of reality という言い方は少しおかしいような気がする。なぜなら、Maugham は同じ短篇集の中で *The Colonel's Lady* を書き、*Appearance and Reality* という題名でも短篇を書いており、appearance と reality が対立的に用いているからである。

ここで *Appearance and Reality* の内容を簡単に述べてみたい。これは中年のフランスの上院議員の話で、金持の議員が、金の力で美人であるがマネキンをしていた若い女性を愛人としている。ところがこの女性が彼の留守中に若い男をひっぱりこんでいた。彼は自分の女性がこのようなことをするのを許せないが、立場が逆であればどうだろう、つまりこの女性に夫がいて、議員の方が彼女の恋人であればどうだろうと言い出すのである。その議員は cuckold にされたという appearance に我慢できないのだから、逆にその若い男と自分の愛人とを夫婦にして、その若い男を cuckold にしてやったらと提案する

のである。その提案が受け入れられて、議員は彼女に持参金をやり、その青年と結婚させる、という話である。reality は女主人公が2人の男を相手に関係をもつのであるが、主人公の議員が appearance にとらわれ、cuckold にされたことを腹をたてて殺人を犯せば悲劇的になる。ところが議員は、彼女と青年とを正式に結婚させることにより、反対に相手を cuckold にしているのであるという快感を得るからというので、彼女に持参金までつけて結婚させる。それで議員自身も、マネキンつまり議員の彼女も、またその相手の青年もそれぞれ満足のいくことになる。しかしこの appearance は reality と対立するものとして出されている。

また *The Colonel's Lady* は、はっきりと題名にしたり、言葉に出しては言っていないが、やはり appearance と reality のテーマを持っているように思える。この2つの短篇には自分の妻または恋人に不貞を働かれることをいかに嫌うか、そして不幸にしてそうってしまった場合にどのように表面をつくらうたらよいか描かれている。もっともあくまで表面的なものだけである。

appearance と reality とは対立したものであるのに *The Happy Couple* の後作で appearance of reality と1語にまとめてしまった Miss Gray の言葉はおかしなものである。また *The Happy Couple* という題名も appearance だけからみてつけられたと思われるが、実際はそうではなかった。つまり、appearance だけではなく reality も強調されていると考えられる。Maugham は、*Cakes and Ale* で Thomas Hardy をモデルに使ったとしてさわがれたが、*The Summing Up* の5章で若い時には、Hardy は忘れられないで残る作家にちがいないというようなことを書いているように、彼は Hardy からかなり影響を受けているようである。

#### 〔Ⅳ〕

*The Happy Couple* の前作と後作とのちがいは、後作になると、1人称主語を用いた形式的な変化が表われ、処女性崇拜風刺、appearance and reality

がより一層明確になった点などがみられるが、また後作には演劇的效果が高められている点が見られるのである。

前作ではまず、Miss Ley が登場し、近所の Craig 夫妻に関して、2人の若い時からの苦悩と、現在の表面は幸福な生活を想像で作りあげていく。彼女は自分の作った story を友人の、Frank に話すが、その Frank が Craig 夫妻と顔を合わせると、夫妻は Frank の顔を覚えていておびえて、妻の方が気を失ってしまう。その描写は非常にはっきりしているがあっさりしすぎて深みがなく、また最後の方でも Craig 夫妻が表面上は幸福な生活をしているが、2人が内心大きな苦しみを背負っているということはわかるが、ただそれだけで終わっている。ところが後作では、どの部分をとってもキメのこまかい描写がなされていて、Craig 夫妻が Landon 判事の顔を見ても、前作のように簡単には気を失ったりしない。Craig 夫妻は2人ともすぐには正体を表わさないで、芝居をして必死に耐え、そして lunch の途中で夫の方が精神的な苦痛に耐えきれなくなって倒れるが、この部分は非常に劇的である。Craig 夫人の方はしぶとく最後まで冷静さを失わないという大変な芝居をするのである。実際に殺人を犯した妻の方がしっかりしていて、殺人幫助で罪としては妻より軽いと思われる夫の方が倒れるというのもやはり Maugham の皮肉であろう。一方 Landon 判事の方も芝居をして、彼は Craig 夫妻と顔を合わせたとたんに Wingford 事件の被告であったことを思い出すのであるが、口には出さず、態度だけで、2人を精神的に追いつめていくのである。Landon 判事は、Craig 夫妻が Miss Gray の家に来てから帰るまで芝居を続ける。つまり後作では Craig 夫妻と Landon 判事の3人が芝居をすることになる。Maugham は短篇小説について、また戯曲的な描き方について、*The Summing Up* の56章で、

This sort of story, one of about twelve thousand words, gave me ample room to develop my theme, but forced upon me a concision that my practice as a dramatist had made grateful to me. (4)

と述べ、また同じ56章で、

I wanted to write stories that proceeded, tightly knit, in an unbroken line from the exposition to the conclusion. I saw the short story as a narrative of a single event, material or spiritual, to which by the elimination of everything that was not essential to its elucidation a dramatic unity could be given. I had no fear of what is technically known as 'the point'.<sup>(12)</sup>

と述べている。Maugham には劇作家としての修業が後年、短篇小説を書くうえで大いに役立っているわけであり、後の方の引用文では短篇に関する Maugham の定義づけをしている。またこの演劇的效果を出す手法は Maugham が考え出したものではなくて、Henry James が考え出したものであるということを同じ *The Summing Up* の58章で次のように述べている。

The method that Henry James devised and brought to a high degree of perfection of telling his story through the sensibilities of an observer who had some part in its action was an ingenious dodge that gave the dramatic effect he sought in fiction, a verisimilitude grateful to an author much influenced by the French naturalists, and a means of getting round some of the difficulties of the novelist who takes up the attitude of an all-seeing and all-wise narrator.<sup>(13)</sup>

この3つの引用文で Maugham の短篇に対する考え方がほぼわかると思う。つまり Maugham の考える短篇小説は、1つの出来事を扱い、ある観察者の感覚を通じて、その物語を語るにより演劇的效果を出し、「落ち」がはっきりすることに恐れをいだかず、簡素に書く物語である。そして Maugham がその手法を身につけるためには劇作家としての修業が役に立ったといえるのである。

これを *The Happy Couple* にみると、narrator にあたる者は、前作では

Miss Ley であり、後作では「私」ということになる。しかし前作の narrator, Miss Ley の背後にはやはり「私」、つまり作者の分身の眼が感じられる。それが後作になるとはっきりと「私」という narrator が登場してくるのである。

以上、*The Happy Couple* の前作と後作とを比較することにより、Maugham の若い時代に書いた短篇と、後年の作品との違いをある程度考察できたかと思う。この作品では先にあげた特徴に加えて、自然描写をあまり気にせず人間への生き方に眼をむけて、登場人物を生き生きと描き、主題をより巧妙に示すために登場人物の複数化を行なうことなどがみられる。

この小論では Maugham を中心にして書いたが近い機会には Hemingway の方を中心に書いてみたいと思う。この両者に共通しているのは常に人間に重点をおき story がはっきりしている点であり、ちがっている点は Hemingway はあまり戯曲的な手法には関心を示していない点、また文体に関しては Hemingway の方が気をつかっているように思う。

#### 注・参考文献

- (1) *The First Forty-nine Stories* : Jonathan Cape. p. 228.
- (2) *ibid.* p. 231~p. 232.
- (3) *W. Somerset Maugham and the Quest for Freedom*, Robert Lorin Calder : Heinemann. p. 152.
- (4) 新英米文学評伝叢書 Maugham : 上田勤 ; 研究社 p. 46.
- (5) *ibid.* p. 152.
- (6) *The Collected Edition of The Works of Somerset Maugham, Creatures of Circumstances*, Heinemann ; p. 211.
- (7) *The Summing Up*, S. Maugham ; Penguin p. 152.
- (8) *ibid.* p. 216.
- (9) *A Writer's Notebook*, S. Maugham : Penguin p. 25.
- (10) *ibid.* p. 209.
- (11) *ibid.* p. 137.
- (12) *ibid.* p. 138.
- (13) *ibid.* p. 144.

ヘミングウェイ研究, 谷口陸男 ; 三笠書房

ヘミングウェイ, 20世紀英米文学案内 ; 研究社.

